

1 次期京都市基本計画策定方針（案）骨子案等について

新 川： 策定方針については、各部会での議論を反映させて作成することになるが、そこまでの手順について取りまとめたものが資料1である。

事務局： 資料1に基づき説明する。前回、研究会の運営方針案で、1回完結のテーマで議論するということを確認したが、その点を踏まえて、進め方・まとめ方について説明する。

第1回から第5回目までの議論の内容、策定方針への位置づけについて示したものが資料1である。

第1回目については、自治体計画行政の現状と課題について、議長から報告を受けて、議論していただいた。これについては、基本計画の在り方ということでまとめている。

この研究会の今後の進め方については、第2回目に京都の未来像の方向付けについて、第3回目に策定方針の骨子案及び部会の運営方針について、それぞれ議論していただきたい、と考えている。

その後、第4回目には、部会における議論を中間まとめしていただき、第5回目に部会及び第4回目までの議論までを通じて、策定方針案をとりまとめていただきたい。

第1回において議論していただいた内容について次のようにまとめている。

下線部については、第1回目の議論以降、京都の未来像メモ等で寄せられた論点である。これらの意見を踏まえて、策定方針（案）骨子案の基本計画の在り方として、戦略的かつ簡潔・明瞭な計画、市民との協働・共汗により策定・推進する計画、柔軟に進化する計画の3点でまとめている。

なお、論点ということで、基本計画の体系、つまり市民のわかりやすさと行政職員のつかいやすさについて委員から指摘いただいたことを記している。

（各委員から特に意見なし）

新 川： まずは、このようなスケジュールで進めるということで、仮置きさせていただく。

2 市民聞きとりアンケートについて

事務局： 資料2及び3に基づき説明する。

9月から10月の3日間、基本計画策定支援チームと新規採用職員が、市民聞きとりアンケートを実施した。個別のテーマ設定については、基本計画策定支援チームが議論し決定した。

当日の状況について、KBSのニュース番組で放映されたものがあるので、そ

れを御覧いただきたい。そのうえで、委員から、アンケート調査の結果について報告の要望もあったので、3グループの代表者から報告させていただく。

(VTR放映)

Aグループ： 報告というより、感想という観点から述べさせていただく。共通テーマとして、京都市政に望むことを聞いたところ、交通網・道路整備、景観の維持、地域とのつながりが上った。先の2点は、市民にとってわかりやすいのかな、という感想。地域とのつながり、という意見も多かったが、京都の更なる魅力という観点では、おもてなし、という意見があった。

個別テーマの地域のつながりを大切にしまちづくりについては、きっかけがつかめない、協力をしたいのだからできない、という意見があった。

いのちについて、子育て世代の母親から、地域のつながりが大切だという意見が多かった。その点は、学校等の質問でも同様だった。

昔なら地域のつながりを意識しなかったが、現在はつながりが薄くなっているように感じられた。

意見を聴く中で、皆さん積極的に回答していただいた。回答の中身については、地域のつながりが薄くなっていることは知っているが、何もできない、していないというのが実情。

市民参加については、きっかけがない、時間がない、という中で、自分からは難しいという現状があるように思った。

市民新聞等を熱心に読み、市民参加も熱心に行っている方だけでなく、実際に聞きにいかないと答えてくれないという意見を市政に生かしていくべきだと思った。

Bグループ： 地域と大学の関わり合いについてアンケートを行った時に個人的に感じたことを説明したい。

これまで行政は窓口に座っていて受身だったが、今回はこちらから声をかけるという攻めの姿勢にスタンスが変わり、どんな意見が聞けるか、という期待。現在の仕事でも窓口に多くの要望が寄せられているので、アンケートでもそうではないかという不安。当日はその両方があった。

実際にアンケートをやってみると、不安はほとんど当たらなかったが、夢を語っていただいたうえで、市民が何をするのか、という観点の回答がなかった。

例えば、60代の男性に、大学生との関わりについて質問したところ、昔は娘がボランティアを行っていたので参加していたが、子供が大学を出てから接する機会がなくなった、という意見があった。20代の女性に質問したところ、現在、英文学科に所属しており、将来、国際交流したい、とのことだったが、結局は主婦かな、という回答。夢の実現についての回答については、すごく遠くなってしまう、という結果になっていた。

ハードルは高くないのだから、きっかけがなく、夢が遠くなっている、という状態にある。

Cグループ： アンケート調査をしたことで、2点得られた。1点目は、メンバーで何度も集まり議論を重ねたことで、行政の職員が市民目線で考えるべきだという認識が深まった。2点目は、当日雨であったが、市民の皆様が温かく、真剣にアンケートに答えていただいた。不祥事の報道に対しても、励ましがあつた。要望だけでなく、こうしたい、という意見も多かった。

個別のテーマについて、「いのち」についてだが、15%の方が不安に思っている方がいらつしやつた。生活環境によって、大きく不安の内容が変わっているようだ。

「知恵」についてだが、伝統産業の活性化を目指す点については、必要な点を挙げていただいているが、産学公が連携して取り組む課題が多いのではないかと、京都市の役割は何か、ということ考えた。

「環境」については、すみよい街づくりについては肯定的であつた。環境については主体的に行動するという答えが多かつた。

「ひと」については、若い人々の方が外国人との交流が多かつた。外国語教育の必要性も見直す必要があると考えた。

市民ぐるみの人づくりについては、子どもに関するボランティアにかかわつたことがある人が意外に多いな、という認識だつた。京都市民の子供を育てていこうという意識の高さを感じた。

市民皆さんで子供を育てていくことが大切だという人が多かつた。昔はそういうことを考える機会が少なかつたが、今は地域コミュニティがうまく形成されていないため、地域コミュニティを形成し、場の提供を行いたい、という意見が多かつた。

市民の方は、京都市に対して強い期待と自分たちで何かしたい、と考えることが多くあつたようだ。

秋 月： 3つのグループの守備範囲はあるのか。それぞれに調査の設問が異なるが、この先、どのように総括していくのか。京都市民に限っていないようなので、観光等のテーマで、市民と観光客との間で、どのような違いがあつたのか。

事務局： 共通テーマについては、大きなテーマを設定し、個別のテーマとして、5つの柱ごとに相応しい設問を、チームが議論して設定した。この両方を合わせてアンケートを実施した。そのため、同じ柱であっても、班毎に質問が異なっている。

トータルで1,200名の方々から、熱心に御回答いただいた。これは統計調査というよりも、市民の皆様の本音の部分ということになるので、基本計画策定の参考にしていきたい。

対象としては、京都市民も居れば、観光客の方々もいらつしやつた。京都市におられる方々に思いを聞かせていただいた。

Aグループ： 観光をテーマに京都駅でアンケートしたが、半分ぐらいが市外の方だつた。京都市は魅力的なまちかという質問をしたが、ほぼ全員がYESという回答であつた。

どういった点が魅力的か、観光客を増やすにはという質問については、京都市民は明確に回答できなかった。

- 乾： 1万2千人市民アンケート調査と、市民聞きとりアンケート調査とのリンクはあるのか。
- 事務局： 特にこの二つのアンケート調査のリンクは特にはない。統計的な情報を得るのが1万2千人市民アンケート調査の目的である。一方、市民聞きとりアンケートについては、市民に全体・個別の想いを聞かせていただきたいという趣旨である。
- 乾： せっかく市民聞きとりアンケートを実施されたので、1万2千人市民アンケート調査に入れ込んでいければ。
- 新 川： アンケート調査は出来上がっているのですが、質問項目に入れ込むのは難しいかもしれないが、分析のところで活かしてもらえれば。
- 空 閑： 実際にまちに出て行って感じられたことが多くあったと思われるが、そのような経験を共有する機会を設けていただいて、リアル感を実感したい。
- 新 川： 特に部会においてはチームメンバーに参加してもらえ、更に詳細に分析したものが、実感を込めて提供していただけたらと思っています。
- 神 吉： 空閑委員の意見に賛成する。一つ一つの質問については数十人にしか聞いていないので、統計的にどうかという話ではない。出来れば、部会において報告していただくときには、質問項目を設定したときの切り口や、鋭い意見など、トータルの解析というよりも、注目すべきやりとりをクローズアップしていただければ、と思う。
- 新 川： せっかくのリアルの声を丸めてしまっては仕方ないので、鋭い形で部会で提供していただければ。
- 松 中： 交通の回答が多いな、という印象だが、公共交通の基盤整備等について、どういった点が重要か、などについて、もう一步掘り下げて報告していただきたい。人と人のつながりという観点で質問されているが、ソーシャルキャピタルの観点が行政の側から上げられている。
ソーシャルキャピタルをどのように形成するのか、という観点からの質問があれば聞かせてもらいたい。
- Cグループ： アンケートを何のためにやるのかという疑問はメンバーにもあった。回答はバラつきがあり、統計学上意味がない。しかし、聞くということ、語りかけることに意味がある、そこからヒントを得られるというきっかけづくりとしたかった。マジョリティを示すこともしたかった。
地域の中のつながりという点についてだが、自分たちは何かしたいという意見は多かったが、何をしたらいいのか、情報をどこから得るのかという回答が多く、とまどいが多かった。60代、70代の方々が多かったが、この年で何かできることがあるのだろうか、子供に関わることができるのか、という質問が多かった。
- 辻 田： 産業・雇用をテーマとした質問が少なかった。一般的にも雇用は重要なテーマであるが、質問が少なかったのは何故か。
- 事務局： 個別のテーマについて、5つの柱ごとに質問をチームで議論して決定した。当初から雇用の問題について外すということはない。
- 新 川： 経済活動や雇用について、京都市政だけでなく、自治体行政においては位置づけにくい、という現状がある。

アンケートの結果については、質問の意味や回答の意味することをもう一度思い起こしていただきながら、京都市政の重要なポイントを部会に活かしてもらいたい、とチームメンバーにお願いしたい。生々しい市民の声をお伝えいただきたい、と考えている。

3 京都の未来像について

事務局： 資料4，5に基づき，ポイントを説明する。

各委員から提出いただいた京都の未来像メモをまとめたものが資料4である。資料5は，次回議論していただく予定の部会運営に関する論点をまとめたものである。

資料4についてだが，意見・提言について，各論については真ん中にまとめさせていただいた。4点ほど小さい矢印で示した点については，意見の中でも提言を頂戴した点である。分野別のまとめ方については，現行の基本計画の構成に分類したうえで，5つの政策的な柱に基づいて分類・整理している。これらの分類・整理を基にして，未来の京都像の全体的な方向付けを左側にまとめている。

大きく，生活と都市という2つの柱でまとめさせていただいた。生活は安らぎの柱，都市は華やぎと市民との信頼関係に対応するのではないかと考えている。

都市の2点目については，市民との信頼関係に関することであるが，まちの未来像というよりは市政の未来像という方向付けに関する点をまとめたものである。

右側の未来の京都象の背景については，未来像に関連する現状について記載させていただいた。

資料5については，部会運営に関する意見であり，次回ご議論いただきたい。

松 中： 都市構造・土地利用の誘導については，公共交通に関する論点と別のところにあるべきではない。

神 吉： 前回，固定的な計画ではなく，見直しもあり，という話もあったので，どういう像を描けばいいのか，悩んだ末に，物事の進め方に考えが及んだ。

今後は，自治体が自主的に地域の実情に即した独自の手法を編み出す能力がないとだめだろうな，と考えた。京都市は，建築等の分野で既にそのような実績がある。首都圏とは異なる手法で京都市はやっていく，という意気込みを京都市，事業者，市民が持っているというのが個性であり，その点について自覚的に行っていくこと。

人口減少等について，部分的にかかっているのではなく，交通・土地利用・環境などに関わり，どういうふうに人口減少を和らげるのかという観点で，「オリジナル施策を」と書いた。

秋 月： 未来の京都像に未来の京都市像が入っているが，刷新の部分が空欄になっている。いわゆる京都地域におけるソーシャルキャピタルに関連するが，ひとつは共汗という点，新たな関係を構築するために，その前提に，機動的な市役所になってもらいたい。原油価格の高騰に対応して緊急融資を実施しているが，その後，原油は暴落している。本当に必要ならば，もっと早く対応するというように，セ

ンシティブかつ機能的な市役所にすべき。審議会が市役所の動きを止めていることも承知しているが。国の画一的という批判だけではもたない。

京都市は、他市と比べてソーシャルキャピタルは充実しているが、これは作るのに何世紀もかかるが、1, 2年で半減するような脆いものであるなので、減らさない、分厚くする必要があるため、金と知恵を使う必要がある。

市民アンケートについて、面白い回答を掘り出して、肉づけしてもらいたい。

空 閑： 学生が社会福祉協議会に実習にいった振り返り授業をしているが、実際にソーシャルキャピタルがあるじゃないか、という気づきがある。

主にいのち、ひとといった社会福祉の関連を書いたが、10年後の夢よりも、今日明日の生活という方々もいる。計画作りや方向付けにおいて、置き去りにされていく人がいないようにしてもらいたい。目をそむけず、意識して目を向けていかなければいけない。そういう取組にってもらいたい。

乾： 教員というよりも大学の事務員の経歴が長く、実務家としての経験が長い。教育委員会と一緒に事業することが多かったが、京都市の教育委員会は全国からも注目されているが、特に、学校周りの社会資本を巻き込みながら、学校の協議会を作りながら事業を実施している。機関としては別であるが、京都府も含めて一緒にやった方が効率的なこともあるし、教育委員会として行っていることを巻き込みながら、一緒に共汗としてやっていく必要がある。

教育委員会がやっていること、未来まちづくり100人委員会など、市民がついついやりたいと言ってしまい、していただけるようなことが出来れば。

辻田委員がおっしゃったが、働くということについて。生活基盤がしっかりしないと市民参加もできないので、そういう視点も入れていかないと、持続可能な運動になっていかない。そのための金のバックアップや、ソフト（文化・芸術）の新しい仕組みづくりも必要だと感じている。

新 川： 市町村行政においては、現状として雇用行政に関わりにくかったが、昨今、若者の就労問題、伝統産業、などを通じて、関わってきている。

辻 田： 知恵、ビジターズ・インダストリーの部分を書いていた。リム委員と御一緒したときに、海外の方を京都に永住される形で受け入れるべきではないか、という議論をした。フィレンツェでは、中国人を受け入れて、毛織物の空き工場を活用して産業を支えているという現状がある。当初は、文化的な摩擦もあるが、新しい産業や元々ある産業が復興することもある。京都は海外の方々から注目されているため、住んでみたい場所にしていける、それが可能な場所であると考えられる。大阪や神戸でも過去に取り組んだが失敗しているようだが、京都は初期条件が異なるし、過去の失敗を踏まえて取り組んでいけばよい。観光都市でもあるし、海外からの受け入れ態勢を整えるという点も重要である。

乾： コンベンション・ビューローがあるが、京都府・京都市・京都商工会議所で構成しているが、今後、どういう活動をしているのか、どういう戦略をたてているのかを知ったうえで、有効に活用していければと考えてみたい。

岡 本： 安らぎのある暮らしに関連するところ。子育て支援に関する調査を実施したが、子育ては日常的な営みであるが、日常的な営みを支えることが大切だということ

が伝わってきた調査であった。

また、何かをやりたいけど、どうしたら情報を得られるのかという点、60代や70代の方が子育てに積極的にかかわっておられた。

地域にせつかく資源があるので、それを有効に活用することが必要。必要な方に必要な情報が届くような広報の仕方を考える必要がある。

これまで自然に人のつながりができてきたが、これからは人工的に作っていく仕組みが必要である。ネットワーク化の仕掛けが私達には必要であり、誰かとつながっているという実感を持ちながら暮らしていくことが必要である。

支援チームがそういった点を感じてこられたと思う。アンケートで得られた宝を報告してもらいたい。

金 武： 資料4について、京都でないと出てこないものと、全国どこでも出てくるものが混在している。京都独自のものと、普遍的なものを分けて出した方が理解しやすかったのかな、と思う。それが2枚の資料に分けていたほうが、議論が出来たような気がする。

2点目は、観光5,000万人の次をどうするのかという視点。5,000万人という数字を出した時点は、他都市にはない仏教界との摩擦時期であり、シンボリックな数字であった、と解釈している。これによって様々なプロジェクトが動き、歴史的な資源を生かし、様々な方々がネットワークを形成されてきた。そういう意味では、京都市が、様々なところとパートナーシップを結び、新しい切り口で、他の都市にはない取り組みを行っていくという視点を出せればと思っている。

もう1点は、教育委員会の部局でも子供に対するアプローチを行う場合、教育委員会で出来ないことができるのではないかな。

行政のそれぞれの部局が、共通の何かを見つけて、他の自治体では行っていないことを実施する、という焦点を絞った戦略的な取組があれば、と考えた。

3点目は、全体的な方向付けについて、京都固有の考え方が出ていない。また、生活という観点が、個人という観点から広がり、ソーシャルキャピタルへ広がっている。そういう意味で、都市と生活という切り口ではないものもあるように思うが。京都流は、全体と分野別の両面に関わることとして表現してはどうか。

また、記述したところが資料1に來ているところがある。京都流の市政運営を行っていただきたい。刷新の部分がないのは弱みではないかな。

新 川： 京都独自の観点と普遍的な観点を分けてみるのもよいかと考える。

また、生活と都市の間に、何か別のレイヤーがあるかもしれない。

坪 内： 職員は大概「受け身」で仕事をしている。要望等が重なるとNOから入ることが多い。そういうところを脱却するのが市民聞きとりアンケートであった。設問に対する回答以外にも、聞いていることが山ほどあると思う。

地域や人のつながりについて回答が多かったことは嬉しいことであり、市民の大きな気持であると感じている。京都のアドバンテージは、文化や景観だけでなく、番組小学校ができた、消防団が組織されている、市政協力員が市民しんぶんを配達している、など、地域力があることもある。

委員からの提案についても、刷新についても考えていかなければならないと感じている。観光について、5,000万人の次の展開についても、各局も問題意識持っていると感じている。

分権制度についても議論が出たが、道州制に向けた大都市制度も考えていかなければならないが、京都市は特別な市であるという意識を持たないといけない、と考えている。

新 川： 地方制度は大きな曲がり角であるが、京都市は特別な市であるという姿勢は、われわれの考えの延長線上にあるのではないか。

横浜市や名古屋市、関西の4つの政令市においても新たな市制についても議論されているようであり、そういった情報もいただきたいと考えている。

次回日程については、11月下旬から12月上旬に向けて、再調整していきたいと考えている。

(終了)